

掛るため明確でない。従って、東西は12町と推定され、南北は後明沢川から数えて16町前後までは推定でき、少なくとも192坪以上（5～6里）の規模を持つと考えられる。一方、後明沢川を挟んで直ぐ南側に広がる大曾根条里遺構とは同一企画によるとは思われない。

2 山形盆地における奈良時代の土器について

山形盆地における奈良・平安時代の土器は、必ずしも明確にされておらず、近年に至って漸くその輪郭が龍気ながら把握されるようになったと言っても過言ではない。従来の当該期を含む土師器、須恵器の研究には、柏倉亮吉氏・小野忍氏、加藤稔氏等の論考があり、近年では、古墳文化の展開に視点を置いた加藤稔氏の研究や、^{(註1)(註2)(註3)}山形市立第三小学校敷地内遺跡の採集資料を基にした小野忍氏の論考がある。^(註4)以下では、主に奈良時代（8世紀～9世紀初頭）に係わると考えられる土器について、上述諸先学の論考および、県文化課が行った調査遺跡の下反田遺跡・西高敷地内遺跡・山辺条里遺跡等から、その概略を述べてみたい。

1 下反田遺跡西区の落込遺構（S×2）出土の土器

S X 2からは、土師器、須恵器がややまとまって出土している。土師器では、a：ロクロ不使用のゆるい丸底を呈する内黒杯の他、f：口縁が「く」の字状に外反し、頸部に段ないし沈線を認める甕（内外面刷毛目調整）等がある。須恵器では、再調整の認められる杯に、以下のA、B 2類型がある。A：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（底部外周、体部下半）、B：回転糸切り→回転ヘラケズリ（底部全周）。再調整のないものでは、D：ヘラ切り無調整の杯がある。他に、F：高台を持つヘラ切りの椀や、H：肩部に回転ヘラケズリのある蓋（ヘラ切り？）、X：外面平行叩目、内面に青海波文または、押圧痕のある甕、Y：大形の長頸壺、Z：大形の短頸壺がある。^(註6)

2 西高敷地内遺跡第141号住居跡（ST141）出土の土器

ST141からは、上述の土師器a、fの他、c：体部外面中央に一条の浅い凹線でわずかながら段を形成する丸底の非内黒杯が出土している。須恵器では、Xの甕類の他、E：底径のやや大き目な静止糸切り無調整の杯がある。これらは、明確な住居跡から出土したセットとして捉える事のできる唯一の例である。これら以外に、細片ながらeとはやや器形の異なるg：頸部に明瞭な段の認められない甕がある。^(註7)

3 山形市立第三小学校敷地内出土の土器

土師器では、d、fの他、b：器形はcと同様で、内黒のものがある。他に、d：体部外面はヘラケズリ調整、下半に刷毛目調整を認め、内面を黒色化処理する高杯がある。須

惠器では、上述のAの他、G：高台を持つ回転糸切りを認める椀があり、他に、肩部に回転ヘラケズリのある蓋Hや、短頸壺Zがある。

4 山辺条里遺跡第51号溝跡（SD51）出土の土器

(註9)

SD51から出土した土器は、土師器では、a、fの他、e：ロクロを用いず、体部中央の凹線、段の認められない非内黒の丸底風杯がある。須恵器では、Bと思われる底部全域を回転ヘラケズリする杯の他、F、Gの椀があり、さらに、X類の甕や鉢がある。

5、二位田遺跡7号住居跡（ST7）出土の土器

(註10)

ST7から出土した土器では、その全体について不明な部分もあるが、須恵器に、C：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（底面全域）の認められる杯があり、蓋では、Hに類するI：天井部切離し面全域を回転ヘラケズリするものがある。

以上の五遺跡で認められる土器の特徴をみてみると、土師器類では、所謂国分寺下層式（註11）（対馬式も含む）の特徴に類似し、杯では、ロクロ不使用のゆるい丸底を呈する内黒杯（a）（註12）と非内黒の杯（e）、体部外面中央に段（凹線）を持つ内黒杯（b）と非内黒杯（C）があり、他に、内黒の高杯（d）等がある。須恵器の杯、類では、回転糸切りの後手持ちヘラケズリを底部外周に行う（A）と、回転糸切りの後回転ヘラケズリを底部外周に行う（B）および、回転糸切りの後手持ちヘラケズリを底面全域に行う（C）が各々認められる。以上のA～Cの切離し後再調整を行うもの以外では、ヘラ切り無調整の杯（D）と、静止糸切りで無調整の杯（E）があり、これらは以上で述べた如く、各々の遺構で土師器各種、杯以外の須恵器と共に伴している。また、明確な共伴が認められていないものの、前述須恵器杯と同形態（底径が大きく器高の低い）で、回転糸切り無調整の切離し技法を示す杯があり、ほぼ同時期かやや後出する時期の所産かと考えられる。これは、回転糸切り無調整杯の初現と考えられるもので、注目したい。

次に、山形盆地周縁山麓に位置する当該期の須恵器を生産する窯跡について若干検討したい。再調整を認めることができる杯類を出土する窯跡は、上山市葉山第3号窯跡、上山市三千刈古窯跡群等で認められている。葉山第3号窯跡の杯は、「口径は勿論、底径も器高に較べて大きい。底部下面には糸切り痕をわずかに認める。また底部周縁は、約1cm幅にわたって箇削りが行われている。この削りは一気に行ったものでなく、數度繰返して一周している。」とされ、回転糸切りの手持ちヘラケズリ調整を行うものと判断できる。これは、上述各遺跡出土々器分類の須恵器杯Aに当り、下反田遺跡、山形市立第三小学校敷地内遺跡等で出土したものに近似している。今の所、こうした調整を認める杯を焼成した窯跡は、山形盆地では、葉山第3号窯跡の内容が明確にされているだけであり、今後とも追求される要がある。これら杯類の時期は、当地にあっては明確にし得ないが、多賀城周辺における

る成果に照せば、Aは8類、Bは7類、Dは6—a類、C、Dは該当例がない。時期的に
(註15)は、8世紀中葉を中心に、9世紀初頭代に掛ると推定されている。しかし、山形盆地における窯跡の実態は明確にされておらず、杯以外の組成や年代等早急に確立されねばならない。

参考引用文献註

- (註1) 柏倉亮吉他『土器集成本編4』東京考古学会編
- (註2) 小野 忍 「山形県古代窯業遺跡の研究」『平野山古窯跡群—山形県における古代窯業遺跡の研究一』所収 昭和45年
- (註3) 加藤 稔 「山形盆地における土師器の編年」『山形市史別巻I 島遺跡』所収 昭和41年
- (註4) 加藤 稔 「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化』所収工藤定雄教授還暦記念会編 昭和48年
- (註5) 小野 忍 「山形市立第三小学校敷地遺跡出土の土器」山形考古第3巻第1号 昭和52年
- (註6) 佐藤鎮雄他「大曾根条里遺構」『山形県埋掘調査報告書第6集』所収昭和51年
- (註7) 佐藤庄一他「西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 昭和54年
- (註8) 註5に同じ
- (註9) 本報告書「V出土遺物」参照
- (註10) 佐藤鎮雄・佐藤庄一他「二位田遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書』所収 昭和51年
- (註11) 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題一』『山形県の考古と歴史』所収 昭和44年
- (註12) 小井川和夫・高橋守克「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学第5号』昭和52年
- (註13) 註2に同じ
- (註14) 註2に同じ
- (註15) 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要』I 昭和50年